

社会体育と生涯教育

——Recreation の視点から——

西 野 仁

(東海大学)

1 はじめに——問題の所在——

近年、オリエンテーリングやジョギング、ママさんバレーボールや、水泳教室、さらにはゲートボールなど、さまざまな活動が、以前にも増して行われるようになってきた。それにつれて、「社会体育」という言葉がそここで使われるようになり、大学に社会体育学科が開設され、社会体育の指導者を養成するための、各種学校が設立されている。

しかし、社会体育という概念は、依然、あいまいで、さまざまな意味あい
で使われている。その結果、社会体育から「体力づくり」や、教育委員会や
公民館が主催する「スポーツ教室」などのイベントを連想する人が少なくない。
この点について、高橋らは、「社会体育は行政が行うもの」「社会体育は、
あくまでも体育であるから、それなりの体裁を整えねばならない」「社会体
育は、初心者や、体育活動になじみのうすい人達を対象とする」などという
とらえ方が一般に強くなされている」ことを指摘している。⁽¹⁾

しかし、平均余命の延びや、自由時間の増大、価値観の変化、さらに、高
齢化社会の到来という大きな社会変化の中で、すでに、そうした従来のとら
え方では、とらえきれないさまざまな活動が、多くの解決すべき問題を含み

ながら行われている事実がある。

たとえば、健康づくりの域をはるかに越えた、ジョギング（ランニングと言うべきかも知れない）や、登山、スキューバダイビング、ハングライダーなどが、最悪の場合、行為者の死亡という事態をまねきながらも、急増していることや、スイミング・スクールや、ヨット・スクール、あるいは、キャンプなどが、無規制に近い状態のまま増加しているなどは誰もが容易に思い浮かべることのできる事例である。さらに、ゲートボールの勝敗にその端を発したと思われる傷害事件の発生や、大会に勝利することのために注意がむけられ自然に技術の高い者のみのクラブへと変化した、限られた人のスポーツサークルの増加などが目立ってきている。そうした勝利第一主義を批判するかのように、同好会などのインフォーマルなグループづくりが盛んになりつつある傾向は認められるものの、それらのグループは、インフォーマルであるが故に、プレイの機会が少ない等の問題が解決されないまま依然残っていることも事実である。

この他にも、社会体育をとりまく問題は、多くある。

しかし、問題の羅列は、問題の解決にはならない。むしろ、問題の発生は、社会変化にともなう自然発生的なものと理解し、問題が発生してきた状況を検討し、多様化した現実至今已までのモデルが、合致しえないのなら、それに即した新しいモデルづくりが必要だというとらえ方をすることの方が、より有効ではないだろうか。

これから行おうとする分析は、そうした考え方を基本に、生涯教育の立場にたって、社会体育を、レクリエーションの視点から考察しようとする一つの論調の概略に過ぎない。

そのために、社会体育を、発展段階にそって、「とらえ方の視点」の変化から見直し、過去の「体育からの視点」や「スポーツからの視点」では、現実に十分即応できないことを指摘したうえで、すでにはじまりつつある、「レクリエーションからの視点」について提案したい。そして、その視点から、いわゆる社会体育に期待される機能と、社会体育の領域についてその社

会的構造と、ライフサイクルの両面から考察し、社会体育が、当面している解決すべき問題について検討したい。

2 社会体育をとらえる視点の変化

——「体育」から「スポーツ」そして

「レクリエーション」へ——

社会体育は、従来、その具体的中身として「体育・スポーツ・レクリエーション」を一つのセットとしてとらえ、その普及を目的としてきた。

大塚は、そのとらえ方について、「体育は、スポーツのような身体活動を通して、人間形成を目的とした教育の営みである。スポーツは自分が好きで行う競技的な性格をもつ身体活動である。レクリエーションは、自由時間に楽しみながら行うもので、その中に身体活動も含まれている⁽²⁾」と、簡単に説明している。もちろん、とらえ方が、十分とは言えないまでも、かなりよく、それぞれの一般的特徴をとらえた説明だといえよう。定義づけをすることが、今回のテーマではないので、ひとまず、大塚の説明のように、体育・スポーツ、レクリエーションをとらえることとして話を進める。

上述したように、従来、社会体育は、三つの領域を具体的中身として実践されてきたが、その三つが、全く同じ程度に重要視されたのではなく、大きくは、「体育」重視から、「スポーツ」重視へと変化し、今さらに、「レクリエーション」重視へと変化しつつあるととらえられる。

ところで、社会体育という概念は、戦前から使われていたようであるが、実際に広く用いられるようになったのは、東京オリンピック大会（1964）以後と考えられよう。

元来、「社会体育」は、学校教育活動以外の体育活動という意味あいでは使われたようである。しかし、それだけでは不十分すぎるので、「社会教育」や「体育」などの類似概念について概観したうえで、当初使われていた概念を明らかにしたい。

社会教育法において、「社会教育とは、学校教育法に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーション活動を含む）をいう⁽³⁾」と規定されている。また体育は、一般的に、「健康な身体の発達を促し、運動能力や、健康で安全な生活を営む態度等を養うことを目的とする教育⁽⁴⁾」ととらえられている。さらに、「社会体育」は「非営利的動機から、その成員の福祉を増進する目的で、自発的な運動を援助し、促進するような活動を総称する言葉⁽⁵⁾」（竹之下、1972）ととらえられてきた。この定義においては、社会体育の目的やその領域は、広くとらえることができるよう考慮されていると言えようが、現実には、前述の高橋らの指摘のように、主として、行政が行う、初心者を対象とした教育活動の一領域というとらえ方が、多くなされてきたようである。

このことは、日本において、学校体育が、まず成立し、学校を中心に、体育やスポーツ活動が行われ、その後、学校以外でそれらの活動が盛んになるにつれ、社会体育という言葉が用いられるようになったことや、また、昭和39年12月18日の閣議決定の「国民の健康・体力増強対策について」の重点的推進目標の一つになった、「(2)体育・スポーツ・レクリエーション活動を普及する⁽⁶⁾」という考え方にもあらわれているような「普及活動」が重要視されたこととも大いに関係があったと思われる。また、当初、社会体育指導者のほとんどは、競技選手経験者や、教師経験者であったことも大きな要因となって、社会体育は、社会の側から、その成員を学校体育の延長線上に位置づける発想で、啓もうされ、推進されてきたと考えられる。こうした状況を、大きく「体育」の視点が重視されていたととらえることには、その異論はあるまい。

もちろん、そうした方法により、地道な運動が浸透し、それなりの成果をあげてきたことは、十分評価できる。

しかし、啓もう期としては、評価できるとしても、最近の状況は、教育的色彩の濃い「体育」の視点からではとらえきれない状況が露呈してきている。

例えば、「営利的動機から」スポーツや、体育の機会を提供するいわゆる「スポーツ産業」が、増加している。また、社会教育のいう「……組織的な教育活動」と呼ぶには問題がある個人のジョギングや、家族で楽しむキャンプが増加している。「……主として、青少年及び成人……」云々も、幼児の体操教室や、赤ちゃんの水泳教室にまでおよんでいる。さらに、体育の「…健康な身体の発達……」以上に、活動そのものに、自己の存在価値を見い出したり、自己実現を期待する身体活動の機能もクローズアップされている。こうした状況の変化もさることながら、「体育」の視点がもつ問題点は、身体活動の領域にまで、教える者と教わる者がいるとする、従来多く行われてきた体育の方法を人々は、必ずしも好まない傾向にあることである。とくに、このことは、生涯教育の視点からは重要で、生涯教育とくに、成人以後の生涯教育のあり方からすれば、そのもつ問題は大きい。学ぶという状態を継続していくことは重要であるが、生涯、「教育される」ということには、嫌悪すら感ずる者も少なくあるまい。もっとも、この問題は、「体育」の方法により、いく分かは解決できようが、それは、決して基本的解決にはならないだろう。

ところで、こうした社会体育のイメージを払拭することをねらいとするかのように、東京オリンピック以後、とくに1970年以後、「一億総スポーツ」、「市民スポーツ」あるいは、「みんなのスポーツ」などの言葉がマスコミを中心に使われだしてきた。社会体育の視点が従来の「体育」重視から、「スポーツ」へと変化してきた具体的あらわれと解せられよう。

スポーツは、「運動競技及び、身体運動（キャンプ活動、その他の野外活動を含む）であって、心身の健全な発達を図るためにされるものをいう」⁽⁷⁾（スポーツ振興法）と定義されてはいるものの、一般的などらえ方は、スポーツ宣言（Declaration on Sport）にあるように、「Playの性格をもち、自分自身あるいは他人との Struggle さもなくば、自然の力との対決を内包している身体活動」⁽⁸⁾との見方が強い。

「体育」から、「スポーツ」への変化は、結果として、「行政指導型」や

「教育色」がうすめられたことや、ハイキングや、キャンプなどの野外活動までも含むことができたなどの効果があった。しかし、一方では、川口が指摘するように、このことから「勝利すること」が絶対的価値をもつことになり⁽⁹⁾さまざまな問題が発生してきた。競技会形式の行事は盛んに企画され、それをめざす多くのグループができたものの、それが自然と、技術程度の高い人達によってのみ独占される傾向が強くなったこともその一つのあらわれだろう。つまり、いわゆる片よったスポーツの「大衆化」の出現である。さらに、多くの識者が指摘するように、昭和43年1月9日の元オリンピック選手、円谷幸吉氏の自殺に象徴されるようなスポーツによる疎外現象さえも生じてきた。このように、「スポーツ」の視点を重視することも、隘路に入ってきた感がする。

以上概観して、少なくとも、次のように考えることができるだろう。

今後、社会体育を、従来のように、「体育」や「スポーツ」の視点を重視し続けるなら、ハッチンスや、デュマズディエが、言うような、「人類を、かしこく、楽しく、健康に生きる」ことのために増大する自由時間を使い、さらに、学ぶ存在であり続けようとする生涯教育の一分野としての十分な機能⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾を、社会体育に期待することは難しくなるだろうと。

だとしたら、どのような視点からとらえてゆくべきであろうか。そのための視点として「レクリエーション」からの視点の重視を提案したい。もちろん、「体育」や「スポーツ」からの視点を取り去ろうという提案ではない。それを残しながらも、「レクリエーション」の視点を中心に施策を再検討することを提案したいのである。もっとも、「レクリエーション」の視点重視の考え方は、決して新しいとはいえない。財団法人・日本レクリエーション協会などの団体を中心に、戦後継続して行われてきた主張でもあるし、大学に設置された、社会体育学科も同様な主張を行っている。とくに、いくつかの大学は、当初、レクリエーション学科の名称で開設したい意向をもっていた学科の名称に、社会体育学科をあてており、さらにそうした学科では、社会体育学科の英訳に、Dept. of Physical Recreation をあてているという事

実もある。

3 レクリエーションをどうとらえるか

社会体育をとらえる視点が、「体育」から「スポーツ」そして「レクリエーション」へと変化しつつあることと、それを重要視することの提案は前述した通りである。

しかし、レクリエーションという言葉も、その使われ方が統一されているとは言えない。

そこで、以下、筆者がレクリエーションをどうとらえているかを明らかにしたい。

そのために、まず、「レジャー」について考え、それとの関係で、「レクリエーション」を定義する方法をとることとする。

レジャーを、余ったもの、派生的なものとみるのか、あるいは、そうではないものとみるのかによって、そのとらえ方は大きく異なってくる。レジャーを、仕事や労働との対比から「余ったもの」ととらえる方法は、生涯教育の視点からは、問題が多い。

むしろ、レジャーを満たされるための空白な時間としてではなく、さまざまな社会的状況の中で選択される活動であるにとらえる方が適当であろう。

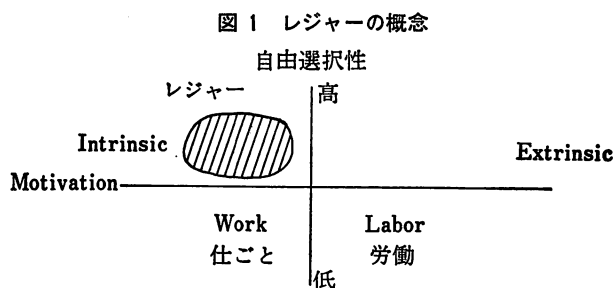
その意味からすれば、レジャーはその行為の程度に差こそあれ、純粹に心的状況であるというよりは、むしろ、Kelly が指摘するように、Doing Something⁽¹³⁾ をさすと考えられよう。

また、レジャーは、他から強制されるものではなく、行為者によって自由に選択されるものである。その選択に関わる要因として、Kelly は、そのこと自身に意味があって、他の満足のための手段ではないとする、Intrinsic-Motivation や、自己を、その中で発展させようとする Self-Development さらには、より親密な人間関係や、信頼関係が認識される基本的集団を充足させたり、発展させたりする、Social-Bonding⁽¹⁴⁾などをあげている。

こうした基本的な見解からくる定義は複雑ではない。

Gordon は、「レジャーは、手段的なテーマを越えて、その中に意味をこめた、自由に選択できる個人的活動」と、Roberts は、「比較的自己決定される non-work な活動」と、また、Kelly は、「レジャーは、主として、それ自身のために選ばれる活動」と定義している。筆者も、同様な見方をする。

つまり、図1のように、自由選択性の高低の軸と、Motivation が、Intrinsic か、Extrinsic かという二つの軸を置き、自由選択性が高く、Intrinsic な Motivation による活動をレジャーと考えているのである。また、自由選択性は低い、Intrinsic な、Motivation によるものとしては、音楽家の演奏会活動や、芸術家の創作活動にみられるような Work (仕事) が、選択の自由性が低く、Extrinsic な Motivation によるものとして Labor (労働) が考えられよう。



このように定義すると、ほとんど全ての活動がレジャーになりうるし、またレジャーにならないということになる。たとえば、テニスをすることは、プロのテニスプレイヤーが、プレイからの報酬を期待している場合は Work か Labor であろう。しかし、テニスそのものを楽しみたくてプレイする場合は、レジャーであろう。日曜大工や、庭いじりや畑しごとなど、従来、Work の要素が強かった活動が、レジャーとして行われるようになってきたことは、大変興味深いことがらである。

この図式において重要なことは、レジャーで得られる満足も、仕事で得られる満足も、非常に似たものではないかということである。仕事において生

きがいを得ることの難しさが増大すると予測される近い将来において、仕事で満足を得れない者が、仕事に類似した活動で満足を得ようとすることは十分予測できる。停年後の生きがいを得るために、給料は不要だから、働かせて欲しいという状況が出現するかもしれない。この図式からすれば、仕事のレジャー化ということも説明しやすくなるだろう。

レジャーを、このようにとらえたうえで、「レクリエーションは、個人的、社会的利益が期待されているレジャー」とひとまず定義したい。⁴⁾レジャーは、個人や社会にとって、プラスの活動ばかりではない。しかし、レクリエーションは、プラスの面が期待され、行われる。どのような利益が期待されるかは、個人のおかれている状況や、社会の状況によって異なろうが、現在、一般的には、気ばらしや、元気回復、より良い人間関係づくり、さらに、自己表現や、自己実現等が期待されている。

4 レクリエーションの視点から 社会体育に期待される機能

「体育」も、「スポーツ」も、そして「レクリエーション」も、広くとらえれば、類似した概念であり、そうした立場からの社会体育に期待される機能は、やはり、類似したものになるだろう。しかし、「体育」「スポーツ」「レクリエーション」を区別してとらえた時には、それなりの特徴が当然期待されるであろう。

「体育」の視点から社会体育に期待した機能は、主として体力づくりに代表される健康の維持増進機能と、基本的な運動技能の習得であったし、「スポーツ」の視点からは、それにプラスして、活動を通してのコミュニティづくりや、スポーツ文化の習得などに焦点があてられていた。

レクリエーションからの視点においても、これらの機能は、当然期待される機能であろうが、他にも、いくつかの、きわめて重要と思われることがある。

ところで、レクリエーションをレジャーとの関連でとらえようとする立場からして、デュマズディエがあげた余暇の三機能、休息、気ばらし、自己開発はごく自然に期待される機能である。

レクリエーションが、その語源から、Re(再び)-create(創造)と解され、期待される利益として元気の回復機能のみがクローズアップされている感が強いのは否定できないが、人が持っている可能性をcreateすることだと解することはできないだろうか。人間が超天文学的数値の確率で生を受け、一生を過す時、その人の持つ可能性の追求は、生活の重要な側面であり、いかに生活の質 Quality of Life の向上に、自己を投資するかは重要なことがらであろう。

マズローは、自己実現を、『自己実現とは、才能、能力、可能性の使用と開発である。そのような人々は、自分の資質を十分に発揮し、なし得る最大限のことをしているように思われる』と説明している。

ところで、人間は動的な存在であって、決して静的な存在ではない。動くことによって、自分の存在を確認できるのである。P. ラングランが言うように、『精神が言葉をもっているように、肉体もそれ自身の言葉をもっている』と考えるなら、社会体育は、その肉体のもつ言葉を習得し、その言葉を使って人間であることを表現し、自己のもつ可能性を追求しようとすることの機会を提供できる重要な機能を持っていると解せよう。

このように、社会体育のもつ機能をとらえた時、それは総合化されたものであり、決して、こまぎれに分化すべきではない。

しかし、全体の機能を形成していると思われる要素に分解した時、その理解は容易になるだろう。このことの理由から、レクリエーションの視点からみた社会体育に期待できる中心的な機能をあげ、簡単に説明を加えたい。

(一) 健康の維持、増進機能

健康は、人間であることの営みにおいて、基本的な必要条件である。健康を損うことは、その営みの根底がくずれることになる。

もちろん、健康は単なる体力の水準で決定されるべきでないし、個人のレベルによる個人の健康が存在する。加齢による体力の低下はむしろ自然であって、その事が健康の低下を意味しはしない。

(二) 身体活動の技術の習得機能

前述したP.ラングランのいう「肉体のもつ言葉」の習得である。それを使って、さまざまな活動が実行できる。

(三) 生活のリズムと、バランスを保つ機能

我々の生活が、常に緊張の連続であったり、逆に弛緩の連続であったりすることは好ましいことではない。リズムを保つこととともに、身体的のみでなく、精神的・情緒的バランスを保つことは重要である。

(四) Identities の獲得機能

Identities は、特に生きがいとの関係で、とらえられる必要がある。

我々の社会は、伝統的に、その程度の差こそあれ、誰もが、ある Identities を得ることができるような方法や手段をかなり良く持ち合わせていた。しかし、機械化や、オートメーション化が進み、仕事や労働などから Identities を感じとれない人が増えつつある。

何もやることがないことは、人間にとって自然な状態ではない。身体を動かす行為や、他人とのプレイは、Identities を獲得する有効な場面であろう。

(五) 自己表現の機能

人は、自分の考えを言葉によって表現すると同様に、自己を身体活動によって表現することができる。今、ブームの様相を呈しているカラオケは、表現活動と見なせようし、多くの高齢者に好まれる民謡なども、自己表現の一つであろう。同様に、スキーや体操やあるいは、マラソン等も表現の一形態ととらえることができる。バスケットボールのシュートがきれいに決まった

瞬間は、体操選手の演技のフィニッシュが決まった瞬間に似ていよう。

(六) Flow Experience と、遊び精神の獲得機能

人間にとっての遊びの重要性を、ここで、指摘する必要はあるまい。

Flow Experience とは、Csikszentmihalyi がものごとに熱中し、我を忘れてしまう状態をさす概念として用いたもので、いわゆる「夢中経験」とでも言いかえよう。この Flow Experience は、遊びとつながりが深いと思われるだけに、Flow Experience の有無は、人生を享受することと大いに関係するであろう。

(七) 仲間づくり (Social) の機能

身体活動、とりわけ、Play の世界では、Social な関係をつくりやすい。その理由は、play は、ホイジンガや、カイヨワがいうように、「時空的に限定された、現実とは異なる世界」だからであろうか。

Social な機能を望むなら、その活動の中身もさることながら、誰とそれをやるのが、より重要な問題であろう。

5 レクリエーションの視点からみた

社会体育の領域

さまざまな活動が、多くの人によってレクリエーションとして行われており、それを側面から援助したりサービスしようとするしかたもいろいろである。レクリエーションの視点からみた、社会体育のカバーされるべき領域は広い。幼児から老人まで、公的なものから民間、あるいは商業ベースのものまで、原初的な遊びから、ルールをもった組織化した遊びまで、さらに、健常者ばかりでなく、身体障害者までをも対象とし、しかも、今の幼児から老人になっていく過程までも、その領域とせねばならないだけに、複雑で、そのとらえ方は難しい。

一般に、複雑な社会現象を把握し、一般法則性を発見したり、理論化したうえでそれにもとづき、実際場面に応用していこうとする時、それらの現象をできるだけ単純化した、理念系としてのモデルを構成しておくことが有効となってくる。生涯教育を意識して、そのモデルをつくる場合、時間経過をひとまず考慮せず、現状を把握するためのモデルと同時に、時間の経過の中で、どう変化していくかのモデルの両方を構成する必要にせまられる。前者については、レクリエーション活動の社会的構造を中心に、また後者については、Life Cycle の視点から考えて行きたい。それは、いわば織物の横糸と縦糸の関係にも似ていると言えよう。

(一) レクリエーション活動の社会的構造

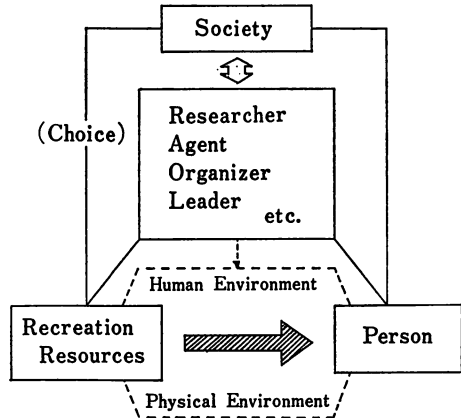
レクリエーションは、個人の生存にかかわる問題であるとともに、社会的なことがらでもあり、個人の側からと同時に、社会の側からもとらえられるべきであろう。

図2は、そうした観点から考えた、レクリエーション活動の社会的構造である。

人のレクリエーション行動の最小単位は、「人」が「レクリエーション資源」を享受することである。「人」は、

それぞれ体力や知識、技術等も含め、レク資源を享受し得る能力に差がある。また、ここでいう「レク資源」とは、スポーツ種目や、日曜大工、庭いじり等のように、その形式等が、比較的はっきりしているものから、瞑想にふけることや、グループづくりそのものの過程なども含め多岐にわたる。もちろん、社会体育は、さまざまな、「レク資源」のうち、身体活動を中心と

図2 レクリエーション活動の社会的構造



したことがらを中心対象とすることはいうまでもない。その資源を享受することは、「人」をとりまく「人的環境（グループや家族など）」と「物的環境（施設や、空間、用具など）」のいわゆるレクリエーションの「場」を介して行われる。「人」が、レクの「場」において、「レク資源」を享受することが、「レク行動」の基本であるが、その行動は、直接的に、あるいは、間接的に、多くの制度や組織や、人々によって側面からささえられている場合が多い。「レク行動」が行われやすいように「場」の整備やプログラムサービスを行うリーダーや、オーガナイザーや公民館などの公的機関、YMCAやYWCAなどの民間団体そして、スイミング・クラブや、スキー場などの商業機関等の存在がそれである。また、研究者や研究組織もこれに含まれる。

こうした、具体的な、実際のレクリエーション活動が行われる状況をあらわす構造を、便宜的に、「ミクロの構造」と呼ぶこととする。この「ミクロの構造」全体は、それをも含めた社会ともちろん密接な関係をもつ。社会が変化すれば、レクリエーションに対する期待も変わってこようし、レク資源の中身も環境も、そして、それをささえる制度も、組織も変化する。以前には、あまり、はっきりと、レク資源とは認識されていなかった日曜大工や、畑しごとが、レクリエーション資源としてはっきりした位置づけをされてきているし、以前にはなかったオリエンテーリングやゲートボールが、その仲間入りをしている。もちろん、逆のケースもあり、以前、盛んに行われたベゴマやメンコなどが、子供達向けのそれから消え去ろうとしている。

「ミクロの構造」と社会とを含めた、大きなフレームを「マクロの構造」と名づける。

レクリエーションをとりまく現象を考える時には、この「ミクロ構造」と「マクロ構造」の両面からとらえるべきであり、小グループや地域社会、そして、日本あるいは、世界との関係で現状の把握と将来予測をする必要性を感じる。

社会体育は、こうした、レクリエーションの社会的構造の中で、「個人が、いかに、身体活動を中心としたレク資源を享受するか」ということを考えて

行くべきであって、根本的には、他の「レク資源」をとらえる立場と何ら変わりはない。たとえばキャンピングが、身体的活動ばかりではなく、音楽活動や芸術的活動などを含むように、社会体育は、身体活動を中心としてはいるものの、他の関連領域を含むものと解釈する方が、現実には即していると考ええる。その意味からすれば、単にスポーツ種目や体操に限定せず、民謡や散策や畑しごとなども含めた広い活動を、たとえ他の領域とダブっても、社会体育が対象とする領域として考えておく必要があろう。

(二) 社会体育と Life Cycle

生涯教育は、人間の誕生から死に至るまでの人生のどの場面においても重要視されねばならないことがらである。そして、それは、常に、人間がいかに人間らしく生きるかということに考え方の基本を置くべきである。

現在、高齢化社会の問題が、大きく、クローズアップされてはいるものの、社会体育は、レジャーやレクリエーション同様、「その社会的役割や、その存在価値は、人生のある時期においてのみクローズアップされるのではなく、人生のどの時期においても重要である。」という考え方にその出発点を置くべきであろう。

ところで、人間一生のライフ・サイクルの分け方には、その視点の違いから、さまざまな方法があり、それぞれの分け方に特徴がある。

ここでは、Kelly らと同様、大きく、三つの時期に分ける方法を採用する。その三期とは、Preparation, Establishing, と Culmination である。

Preparation の時期は、人生の準備期として、親から学んだり、教師や友人から学んだりする時期であり、生まれて、いわゆる一人前の大人になるまでの時期をさす。第二期の Establishing は、十分一人だちで、家族を養い、そして、社会的な地位を獲得したりできる時期である。第三期の Culmination は、いわゆる停年以後の時期をさすが、この時期のとらえ方は、前二つの時期にくらべ、さまざまな立場からの主張がある。

大部分の生活が過去のものとなり、未来に限りがあると認識された人生の

最後の時期を Calmination Period と呼ぶ。簡単には、それまでの生き方を、あるまとまったものに集大成していく時期ととらえようとする視点にたったの分け方である。

もちろん、こうした分け方は、あくまでも一応の区分であって、個人によって、その移行時期に差があることはいうまでもない。

以下、それぞれの時期に、どのような、社会体育の機能が、クローズアップされるかについて簡単に考えてみたい。

㊦ Preparation Period について

ここでは、やがてくる将来についての十分な準備とともに、この時期そのものを充実させる必要があろう。体力の増進、Skill の獲得の他に、Play を通しての Flow 体験は、身体活動で enjoy することの経験であるだけに重要なことからであろう。とかく、受験戦争にまきこまれやすい現実の中で、生活のリズムを身につけることや、身体活動による、自己表現の基本を身につける絶好の機会であろう。

㊧ Establishing Period

体力を増進することより、それを維持することに留意する時期であろう。また生活が仕事中心になる中で、生活のリズムを変え、より積極的な気晴らしや、回復を目的とした身体活動が必要となろう。また、この時期には、家族はもとより、周囲との人間関係の改善のためにも身体活動は、その機能を期待できる。

また、最近の急速な機械化や自動化が、それまで比較的得やすかった仕事を通じての自己の役割確認を難しくしている。自分をどこで表現し、どこで確認していくかについて、身体活動に大いに期待できよう。

さらに、Preparation の時期には経済的などの理由から経験することの難しかった活動を体験することにより、新たな Flow 経験を十分期待できる。ゴルフや、ヨット、スキーなどは、その活動例となろう。

㊨ Culmination Period について

自分を取りまく、多くのことがらが低下してくる Culmination Period に

おいては、とくに自分の存在をどう自分自身で確認するかという Identities の問題がクローズアップされよう。とくに、社会に対する自分の役割の低下や、いわゆる体力の低下にともない、これからの生活に対し、恐れたり、悲しんだりする者も少なくない。しかし、自分のおかれた状況を受け入れ、正しく認識しながら自分の一生を意味あるものにまとめあげようとする者も多い。

仕事から引退せざるを得ない大多数の者が、ただ、ぼんやりと毎日を過ごすのではなく、庭いじりや、散歩や、釣りや、あるいは民踊やゲートボールなどを通して、安定した精神状態を維持し、積極的に人間関係を獲得しようとすることは重要なことであろう。ゲートボールが近年、急速にひろまったのは、Culmination Period に、それを受け入れる潜在的需要があったためであろう。

6 レクリエーションの視点からみた 社会体育がかかえる今後の課題

——まとめにかえて——

生涯教育の立場に立って、社会体育を考えた時、「体育」や「スポーツ」の視点からだけでは社会のニーズに十分対応しきれないという立場をとり、「レクリエーション」の視点を重視することを提案してきた。このことは、簡単には、社会体育をそれを行う側からは人生をかしこく、楽しく、健康に生き、しかも自分の可能性を追い求めるための、「Physical Recreation」ととらえ、それを普及し、推進しようとする社会の側からは、それを援助していく、「サービスシステム」ととらえようということである。

しかし、視点の変化だけでは問題の解決にはならず、当面する問題を見きわめ対策をたてることが重要なことになろう。

そこで、まとめる意味で、いくつかの課題を提起し、ひとまず、論調を終えたい。

㊦ 社会体育概念の整理

社会体育が、人によって、さまざまな解釈がなされていることは前述した通りである。そのことは、よく解釈すれば、その言葉のもつ柔軟さとも理解できようが、それにしても社会体育を専門としている人々の間でさえも、その差があり過ぎることには問題があろう。いまだ、社会体育推進の目的は、競技人口の底辺を拡大し、優秀な選手を育成することにあると真剣に主張する関係者がいることからしても、現実には、施策にたずさわる人々には、さらに大きな考え方の相違があることは推測できよう。概念を、ただ一つに統一すべしという主張ではない。しかし、大きな差を小さくするために、概念の整理をする必要はあろう。その過程で、社会体育という呼び名が適当でないとしたら、その改正をも含め検討すべきだろう。

㊦ サービスシステムの整備

サービスを利用する側にとっては、より良いサービスを、より手軽に受けたいのであって、公的、民間、商業的などのサービスの提供者の違いは大きな問題ではあるまい。だとすれば、それらの全てを含めて、全体としてのサービスシステムの整備ができないかを検討したい。当初、問題が多いと考えられた学校開放が、成果をあげているように、民間や商業施設が開放されたり、低廉で利用できるようなトータルなシステムの整備が望まれる。

㊦ 研究の推進

この分野での研究は、その必要性が指摘されてはいるものの遅れている。

とりわけ、レジャーの行動科学的研究は、過去に十分な研究が行われていなかった。そのことが、効果的なプログラムサービスの提供や、利用しやすい施設の建設に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

㊦ レジャーの教育の普及と推進

自由時間を意識してから、その使い方を検討するのでは遅すぎる。日常の⁶¹⁾ Life Style そのものが重要であろう。その意味からすれば、十分なレジャー⁶²⁾ 教育が行われるべきである。

そのためには、質的にすぐれた指導者が多数いることが不可欠になろう。⁶³⁾

この点に関して、まもなく開校される国立鹿屋体育大学への期待は大きい。
また、それに関連して、社会教育主事のような、レジャーやレクリエーション指導者の国家認定の制度なども十分検討されねばなるまい。

〔注〕

- (1) 高橋・今村編著「社会体育とその指導」東海大出版会、1976年、p.16
- (2) 大塚編著「体力づくりハンドブック」第一法規出版、1971年、p.144
- (8) 「社会教育法」第一章総則第2条（社会教育の定義）、『体育スポーツ総覧』ぎょうせい、p.1,551
- (4) 新村編『広辞苑』（第二版）岩波書店、1970年、p.1,327
- (5) 竹之下『プレイ・スポーツ・体育論』大修館書店、1972年、p.87
- (6) 「国民の健康・体力増強対策について」1964年12月18日 閣議決定『体育スポーツ総覧』ぎょうせい、p.5,017
- (7) 「スポーツ振興法」第一章総則第2条（定義）『体育スポーツ総覧』ぎょうせい、p.197
- (8) 影山・中村・川口・成田編『現代スポーツ論序説』大修館書店、1977年、p.197
の川口の訳による。原典は、ICSPE（国際スポーツ、体育協議会）のスポーツ宣言。
- (9) 同上、p.201
- (10) 新井「ラーニング・ソサエティの意味」『現代のエスプリ』（No.146）至文堂、1979年、p.9。原典は、Hutchins, R. M. の The Learning Society.
- (11) J. デュマズディエ、中島訳『余暇文明に向って』東京創元社、1972年、p.17
- (12) Kelly, J. R. : Leisure in Later Life unpublished paper 1982
- (13) 同上
- (14) Gordon, Chad, C. Gaitz, and J. Scott. : Leisure and Lives : in R. Binstock and Eshanas, eds. Handbook of Aging and the Social Sciences, N. Y : Van Nostrand Reinhard 1974, p.313
- (15) Roberts, K : Contemporary Society and the Growth of Leisure. London : Longman, 1978, p.7
- (16) Kelly, J. R. : Leisure. Engliwood cliffs, N. J. : Prentice-Hall 1982, p.23
- (17) Kelly も同様なとらえ方をしている。
- (18) (11)と同じ
- (19) 同様の概念は、Leisure and the Quality of Life, AAHPER, PRESS 1972年

に詳しい。

- ㉑ フランク・ゴープル, 小口訳『マズローの心理学』産業能率短大出版部, 1972年, p. 35 を引用した。原典は, Maslow, A. H. : Motivation and Personality. Haper and Row, New York, 1954
- ㉒ P. ラングラン, 波多野訳「生涯教育入門」全日本社会教育連合会, 1974, p. 76
- ㉓ この主張については, Kelly らとともに, 討議をかさねたものである。
- ㉔ Csikszentmihalyi, M. : Beyond Boredom and Anxiety. Jossey-Bass Publisher London, 1977
- ㉕ ヨハン・ホイジンが, 高橋訳「ホモ・ルーデンス」中央公論社, 1963年, pp. 26～7
- ㉖ ロジェ・カイヨワ, 多田・塚崎訳「遊びと人間」講談社文庫, 1973年, pp. 35～6
- ㉗ この概念は, 1979年に, 筆者自身, 日本レクリエーション学会大会 で発表した。
- ㉘ この見方は, Rapoport, R and. R N の : Leisure and the Family Life Cycle. London : Routledge and Kegan Paul, 1975 に見られる考え方に共通している。
- ㉙ ㉑と同じ
- ㉚ 同上
- ㉛ Leisure と Life Style に関しては, Kaplan, M. の : Leisure, Life Style and Life Span. Saunders Company : Philadelphia, Pa, 1979 に詳しい。
- ㉜ Leisure Education に関しては, Munday, J. と Odum, L. の Leisure Education Theory and Policy. John Wiley & Sons : New York, N. Y., 1979 に詳しい。
- ㉝ この主張は, ジャン・フラスチエ, 小関訳『開かれた時間』川島書店, 1976年 p. 160 にもみられる。